

閉会の挨拶

前川 亨

白藤先生が『君たちはどう生きるか』に言及しながら感動的に総括して下さいましたので、今さら私が挨拶するのは誠に蛇足ではありますが(笑)、あと数分だけご辛抱下さい。

本日予定しておりましたシンポジウムの日程は、以上で全て終了致しました。最後までお付き合い下さいまして、誠にありがとうございました。本日のこの経験が、今後の皆さまの社会生活に少しでも寄与する内容を持っていたとしたならば、主催者としてこれほど嬉しいことはありません。

暉峻先生のご講演、それに続く個別企画、いずれも内容は明快であったと思いますので、それをここで改めて振り返ることは控えます。おそらく、これらを通して、「対話」についての見方、考え方がいかに多様であるか、それがいかに興味深く、かつ困難な課題であるかをお感じになったのではないのでしょうか。「対話」が本質的にそうであるように、このシンポジウムもまた、一義的な結論を導くものではありません。もちろん、現実社会においては何らかの結論を導かなければならないこと、そのために決断を必要とする局面は常に存在します。そうでなければ我々の社会は進んでいきません。しかし同時に、だからと言って何らかの結論を導かない議論は常に無益で非効率的・非生産的だとする立場には私は全く与しません。日本のみならず世界規模で近年際立っている余りに著しい知的荒廃と劣化——異説への不寛容、品位を欠く過激な言辞が持て囃される傾向など——が何に由来するのか、グローバリゼーションと果たして関連するのかどうかといった問題に立ち入ることは出来ませんが、今回のこの重層的な「対話」の試みは、それ自体が、昨今のこうした反知性主義の蔓延への抵抗としての意味を持つと私は確信しております。

最後に、このシンポジウムを聞いていて、私の心に浮かんだ二つの書物を紹介させて下さい。一つは、開会の挨拶でも言及した政治学者・丸山真男の『自己内対話』(みすず書房、1998年)です。対話はもちろん基本的に他者との間で行われますが、それだけに留まりません。他者との対話をどこまで意義深いものにするか、それを支えるのは自己との絶えざる対話です。自己との対話が出来ない人は他者との対話が出来ない。「自己内対話」という言葉は「他者感覚」と並んで、丸山が遺してくれた重要な言

葉です。もう一つは、遙か昔に遡って古代ギリシャのプラトンの『饗宴』です。『饗宴』という訳語が定着していますが、ギリシャ語の原語はSymposion、まさにシンポジウムです。もっとも、プラトンのシュンポシオンで中心的なテーマとなったのはエロスと美の問題で、そこでは酒も酌み交わされたのに対して、私たちのこのシンポジウムのテーマはとても重たい社会的な問題で、酒も出ませんでした。この後、皆さまそれぞれに今回のテーマについて更に語り合って頂ければ幸いです。本日はありがとうございました。(拍手)